
曲目紹介

F. リスト：パガニーニによる大練習曲 S. 141/R. 3b 第3曲「ラ・カンパネッラ」

ニコロ・パガニーニのヴァイオリン協奏曲第2番第3楽章のロンド主題を編曲して書かれました。名前の Campanella は、イタリア語で「鐘」という意味で、ピアノの高音により鐘の音色が表現されます。主題は、パガニーニのオリジナルの主題とは一部変更されていますが、これは、オリジナルが出版される前に、記憶を元にリストが作ったためとみられています。

F. リスト：愛の夢 S. 541/R. 211 第3番

ドイツの詩人ヘルマン・フェルディナント・フライリヒラート(1810-1876)の詩による独唱歌曲として1843年末頃に作曲されたものを、作曲者自身がピアノ独奏版に編曲したものです。「おお、愛しうる限り愛せ」から始まる詩は、恋愛のことではなく、人間愛をうたったものです。その内容は、以下のとおりです。

「あなたがお墓の前で嘆き悲しむその時は来る。だから、愛しうる限り愛しなさい。自分に心を開く者がいれば、その者の為に尽くし、どんな時も悲しませてはならない。そして口のきき方に気をつけなさい、悪い言葉はすぐに口から出てしまう。『神よ、それは誤解なのです!』と言っても、その者は嘆いて立ち去ってしまうだろう。」

F. リスト：リゴレット・パラフレーズ S. 434/R. 267

ジュゼッペ・ヴェルディの歌劇『リゴレット』第3幕の四重唱「美しい恋の乙女よ」の音楽を編曲したものです。即興的な序奏で始まり、主部では即興的なパッセージの付加や繰り返しがある他は、ほぼ原曲の構成に忠実に編曲されています。短いコーダは、プレストとなり、ダブルオクターヴの華麗なパッセージで締めくくられます。

R. シューマン：交響的練習曲 Op. 13

1834年から1837年にかけて作曲され、「12の交響的練習曲」として最初に出版されました(第1版)。それは、主題と12の練習曲(そのうち9曲は主題に基づく変奏曲で、最後の1曲「終曲」はハインリヒ・マルシュナーのオペラ「聖堂騎士とユダヤの女」の中のロマンス「誇らしきイギリスよ、歓喜せよ」の主題を元とした変奏曲)から構成されています。その後、1852年の第2版では主題と関連をもたない第3曲と第9曲がカットされ、「変奏曲形式による練習曲」のタイトルが付けられました。そして、ヨハネス・ブラームスの校訂により1890年に出版された第3版では、第1版に加えて、作曲されたものの第1版に入らなかった5曲が「遺作」として加えられました。

現在は、ほとんどが第1版か第3版のいずれかで演奏されていますが、今回は、第1版での演奏となります。

タイトルに「交響的」と付けられているように、オーケストラを思わせる豊かな響きと大きなスケールを持った作品となっています。

M. ラヴェル：夜のガスパール

フランスの詩人ルイ・ベルトラン（1807-1841年）の詩 52 篇・断篇 13 篇からなる遺作詩集「夜のガスパール」からベルトランの詩集から「オンディーヌ」、「絞首台」、「スカルボ」の 3 篇に想を得て、1908 年に 3 曲のピアノ独奏曲からなる組曲を作曲しました。

3 曲は、ソナタ楽章—緩徐楽章—ロンド楽章の順に構成され、古典的なピアノ・ソナタが意識されている一方、開始楽章と終楽章の調性が一致せず、各楽章に詩的な題名が割り振られているところは、ロマン派的な性格的小品集や標題音楽に近いともいえます。しかも、和音構成や旋法的な旋律においては、印象主義音楽の類型が表れていて、音楽的知識と感性、想像力が高度に統合された、ラヴェル初期のピアノ曲の最高傑作です。

第 1 曲「オンディーヌ」Ondine 嬰ハ長調、Lent（緩やかに）、4/4 拍子

『水の戯れ』、『洋上の小舟』（『鏡』）と並ぶラヴェルの「水」3 部作とする向きもあります。終始複雑で細かいアルペジオが左右で入り組む難曲です。ソナタ形式で、詩の内容（人間の男に恋をした水の精オンディーヌが、結婚をして湖の王になってくれと愛を告白する。男がそれを断るとオンディーヌはくやしがってしばらく泣くが、やがて大声で笑い、激しい雨の中を消え去る）に忠実に基づいていると言われていています。

第 2 曲「絞首台」Le gibet 変ホ短調、Tres lent（きわめてゆっくりと）、4/4 拍子

変ロ音のオクターヴが終始一貫して葬送の鐘のように不気味に鳴り響きます。きわめて遅く、重々しいテンポはまったく変更されませんが、それとは裏腹に拍子はめまぐるしく変化を重ね、その結果、暗澹茫漠たる雰囲気醸し出されます。「鐘の音に交じって聞こえてくるのは、風か、死者のすすり泣きか、頭蓋骨から血のしたたる髪をむしっている黄金虫か……」という詩の内容に準じたものと思われています。

第 3 曲「スカルボ」Scarbo 嬰ト短調、Vif（速く）、3/8 拍子

急速なパッセージと強弱の激しさ、そして不気味な旋律が、自由に飛び回る小悪魔を描きます。急速な連打音やアルペジオによる複雑な運指が、この曲を至って困難なものとしていて、リストの『メフィスト・ワルツ』第 1 番が下敷きとなっています。

F. リスト：超絶技巧練習曲集 S. 139/R. 2b より 第 5 曲「鬼火」

12 曲からなる「超絶技巧練習曲集」は、2 度の改訂を経て最終的に 1851 年に完成しました。標題は、初めから意図されたものではなく、出版する際にリスト自身か出版者によって付けられたものです。鬼火が音楽に取り入れられたのは、旅人の道を迷わせたシューベルトの連作歌曲集「冬の旅」からはじまったもので、リストはこの空想的で正体のないものの表現を細密な技巧で試みました。半音階からはじまり重音、跳躍などを駆使した、まさに「超絶技巧」という名にふさわしい難曲です。

F. リスト：スペイン狂詩曲 S. 254/R. 90

演奏旅行でスペインを訪れた印象を元に 1845 年に「スペインの歌による演奏会用大幻想曲」が作曲され、同じ旋律を用いて、1858 年に作曲されたのがこの曲です。前半ではフォリア、後半ではホタ・アラゴネーサ（アラゴンのホタ）というスペインの舞曲が用いられ、終盤ではフォリアが華麗に再現されます。